

「ガンと介護」を考えてみよう

第14回スミセイさわやか介護セミナーは「明るく、楽しく、『介護』を考えよう」をテーマに富山市で開かれました。1日目は高志会館で、大腸がんを患ったジャーナリストの鳥越俊太郎氏が「ガンと向き

合って」と題して講演しました。2日目は大和ハウス工業富山支店で介護ロボットを体験する介護実技セミナーが行われました。一般財団法人住友生命福祉文化財団、北日本新聞社主催。

講演

「ガンと向き合って」

ジャーナリスト 鳥越俊太郎氏

人生には上り坂と下り坂、もう一つ「まさか」という坂があります。命に関わるような病気とは無縁だった私は2005年夏、その「まさか」という坂にさしかかりました。最初は毎晩飲むビールがまじり上って出血している。やがて、その当時は分からなかった。それから、それが水が赤黒くにごるということが続き、ある日、便器が鮮血です。幸か不幸か告知を受けて真っ赤になった。私はそのとき、「これは、痔だ」と思ったんです。でも、やはり心配に

う。人生観や死生観、家族のこと、いろいろな思いが交じり合う。脳天気な私も、自分の命、人生を考えた。貴重な時間をいただいたと思います。

ましたが、転移はなかった。ただ大腸がんの場合、リンパだけではなく、血流に乗って肺や肝臓に転移する可能性がある。定期的に検査を受けていました。リンパへの転移もなかったし、これで大丈夫だろうと思っていました。

自分で見つけ、早めの処置を

腹鏡手術を受けました。お腹に5ミリの穴を4カ所開けるだけなので体の負担が少

ない手術です。直腸を20センチ切り、医者診断はステージ2でした。リンパ節も調べ

テレビに出演していました。私の大腸がんは、転移がなかったことで、ステージ4と診断が変更されました。ステージ4の大腸がんの5年生存率は20〜30%です。5人に1人ぐらいいしか生き残れない。私はそのうちの一人だったわけです。



とりごえ・しゅんたろう 1940年、福岡県生まれ。京都大卒業後、毎日新聞社に入社。新潟支局、東京社会部、外信部(テヘラン特派員)などを経て、1988年「サンデー毎日」編集長。退社後、活動の場をテレビに移す。2005年、大腸がんが発覚。4度の手術を経験。筋力トレーニングによりがん罹患前以上の健康を得て、「ニュースの職人」として活躍中。

パネルディスカッション

「ガンの在宅ケアと注意点」

パネルディスカッションは「ガンの在宅ケアと注意点」をテーマに開き、富山県在宅医療の中川彦人会長、千石ケアサービス(富山市)の野村明子氏、アマネージャー、真生会訪問看護ステーション(射水市)の中井ともこ氏、保健師がそれぞれの立場から在宅ケアについて話し合った。

パネリスト

中川 彦人氏(富山県在宅医療会長)
野村 明子氏(千石ケアサービス・ケアマネージャー)
中井ともこ氏(真生会訪問看護ステーション・保健師)
コーディネーター
岩本 聡(北日本新聞社論説委員長)

在宅医療の現状について、中川さんは「富山は在宅医療の基盤が整っている県。在宅医療には介護や急変時の対応、死そのものの恐れなどの不安があるが、医療、福祉それぞれの専門家が連携し、少しでも良い環境で在宅医療を受けられるよう努力している。日常生活の延長線上に死を迎えられたら良いと思う」と話した。中井さんは「入院中、険しい顔をしていた患者さんも住み慣れた家に帰ると穏やかな表情になることが多い。痛み止めを使う回数も減り、在宅医療の力を感えている」と述べた。

安定剤も使う。薬剤師がチームに加わっていることで、薬の使用や管理はスムーズにできるようになっている。中井さんも指摘していたが、家に帰ると私たちに話してもらえば、何らかの解決策が見つかると思う。中井さんは「患者と家族がかげがえのない時間を過ごせるよう、解消できる不安は私たちに任せてほしい」と話した。

日常の延長にある死

中川

不安なことは相談を

野村

痛み止めの回数減る

中井

末期がん患者の痛みのケアは家族の最大の心配事だ。中川さんは「医療用の麻薬のほか、精神的不安が強い場合は精神

と病院に入院していたときに比べ薬の量が減るケースがある。やはり安心感があるからだろう」と指摘した。

中川さんは「開業医の役割は、住み慣れた地域で安心して暮らすことを医学を通じて支援すること。病気を治すだけの医者ではない。せひ、かかりつけ医をつくり、相談してほしい」と述べた。

スミセイさわやか
介護セミナー



スミセイさわやか介護セミナー会場

在宅医療では介護保険の上手な利用が鍵になる。野村さんは「末期がんや診断された人は40歳から介護保険を使い、実際に利用する人が増えている。介護認定のスピードも速



中川 彦人氏



野村 明子氏



中井ともこ氏